

ハイチ人作家エミール・オリヴィエとモントリオールのハイチ人 コミュニティ (1)

Èmile Ollivier, Haitian Author and hatian communities in Montreal (1)

荒井 芳廣*
Yoshihiro ARAI

<キーワード>

エミール・オリヴィエ, ハイチ移民, モントリオール

<要 約>

ハイチ移民にとって、モントリオールは、移民の最終目的地であると同時に北米、特に合衆国東海岸の諸都市、ニューヨークやボストンへの移民の中継地の1つと考えられていた。中継地として選ばれる条件には、地理的近接性と言語＝文化的近接性などが挙げられるが、カナダのフランス語圏であるケベック州の中心地であるモントリオールは、上記の合衆国諸都市に比して地理的に遠いにもかかわらず、中継地であったのは、言語＝文化的な近接性に因っていた。ハイチ→モントリオール→合衆国東海岸諸都市というルートである。しかし同様の条件をもち、かつ地理的な近接性を有する移民先（マルチニック、グアドループ、仏領ギアナ）と比較すれば、モントリオールは、距離が遠さとその都市的環境から、移民者の職業や階層に違いがあった。就労の機会も多く、フランス語に習熟したエリート層にとっては、移住の最終目的地となった。都市的環境をもちながら、移民の波の初期においては、中継地であると同時に最終目的地あるという二面性をもっていたのがマイアミであった。しかしマイアミは、1957年のキューバ革命以来、キューバ人をはじめとした中南米のスペイン語圏あるいはブラジルからの移住者によって移民共同体として大きな変容を遂げることなる。マイアミの移民共同体の事例は、「各移民共同体は、人種、宗教、言語などの違いによって社会の階層構造のどこかに位置づけられ、この階層の階梯を上昇しようすれば、自分の共同体の外にある主流の価値体系を採用し身につけなければならない」というシカゴ学派による移民共同体に関する都市社会学命題に対する反証例であるとする仮説を生み出している (cf. Portes, A. & Stepick, A. 1997)。マイアミでは特定の社会集団が主導権を握るのではなく、複数の社会＝文化システムが併存しているという視点である。近年、合衆国のハイチ移民には、合衆

国各地からマイアミに再移住する動向が見られるという。

一方、エミール・オリヴィエ (Émile Ollivier, 1940-2002) は、1977年から2000年までモン
トリオール大学の教育学部で教育社会学の教授として教鞭をとりつつ、小説を発表し、フラ
ンスおよびカナダの文学芸術アカデミーの会員に推挙されたハイチ移民の作家である。オリ
ヴィエは、1940年にハイチの首都ポルトー・フランスに生れ、哲学および社会学を学び、学
生運動に参加しながら創作活動を始めたが、F・デュバリエと対立したため亡命を余儀なく
され、フランスを経て1965年にケベック州、1968年にモントリオールに移住して以降は、モ
ントリオール大学近くのコト・デ・ネイジュ (Coté-des-Neiges) に定住し、多くの作品を発
表した。本発表は、文学者であると同時に社会学者であった作家の虚構作品やエッセイのう
ち『航海記』(Passages, 1991) と『立ち位置測定』(Repérages, 2001) の中に表現された、30
年以上にわたるハイチ移民の動向に対する優れた考察を整理し分析する。本論文はその前半
である。

1. はじめに

1980年代中頃まで、モントリオールは、ハイチ
移民にとって、国外移住行為の最終目的地である
と同時に北米、特に合衆国東海岸の諸都市、
ニューヨークやボストンへの移民の中継地の1つ
と考えられていた。その当時、なぜ中継地として
選ばれたか、その条件としては、地理的接近性と
言語=文化的接近性などが挙げられるが、カナダ
のフランス語圏であるケベック州の中心地である
モントリオールは、合衆国諸都市に比して地理的
に遠いにもかかわらず、中継地であったのは、言
語=文化的な接近性に因っていた。ハイチ→モン
トリオール→合衆国東海岸諸都市というルートで
ある。しかし同様の条件をもち、かつ地理的な近
接性を有する移民先(マルチニック、グアドルー
プ、仏領ギアナ)と比較すれば、モントリオール
は、距離の遠さ(航空運賃が購えるという条件)
とその都市的環境から、移民者の職業や階層にマ
ルチニック、グアドループ、仏領ギアナとの違い
があった。就労の機会も多く、フランス語に習熟
したエリート層にとっては、移住の最終目的地と
なった。同様に都市的環境をもちながら、移民の
波の初期においては、モンtréalと同じ中継地
であると同時に最終目的地であるという二面性をも
っていたのがマイアミであった。しかしマイア
ミは、1957年のキューバ革命以来、キューバ人
をはじめとした中南米のスペイン語圏あるいはブラ

ジルからの移住者によって移民共同体として大き
な変容を遂げる事となる。マイアミの移民共同体
の事例は、「各移民共同体は、人種、宗教、言語
などの違いによって社会の階層構造のどこかに位
置づけられ、この階層の階梯を上昇しようすれば、
自分の共同体の外にある主流の価値体系を採用し
身につけなければならない」というシカゴ学派よ
る移民共同体に関する都市社会学命題に対する反
証例であるとする仮説を生み出している (cf.
Portes, A. & Stepick, A. 1997)。マイアミでは特定
の社会集団が主導権を握るのではなく、複数の社
会=文化システムが併存しているという視点である。
近年、合衆国のハイチ移民には、合衆国各地
からマイアミに再移住する動向が見られるという。

こうしたハイチ人の国外移住についての集団的
な体験を、モントリオールに移住し、30年にわ
たって活動した作家エミール・オリヴィエの『航
海記』(Passages, 1991) は、自分自身をモデルと
していると思われる主人公と彼を取り巻く数人の
登場人物の物語としてその時間的空間的構造を再
構成してみせる(図-2)。彼が継承していると思
われるハイチの文学的伝統、「魔術的リアリズム」
のスタイルで書かれている作品(翻訳されて
いる唯一の虚構作品である短編「ほら、ライオン
を見てごらん」)でもその根底には彼のもう一つ
の職業である社会学者としての視点が深く刻まれ
ている。

2. エミール・オリヴィエ研究の意義と概説

(1) エミール・オリヴィエという作家

エミール・オリヴィエ (Émile Ollivier) は、1940年にハイチの首都ポルトー・プランスに生まれ、ハイチ国立高等師範学校で哲学を修めたのち社会学を学び、さらにフランスに渡って文学と心理学を学んでいる。世代的にはハイチ人作家では国外で最も知られている作家であるジャック＝ステファン・アレクシー (Jacques-Stephen Alexis, 1922-1961) の直後の世代であり、フランケチエンヌ (Franketiègne, 1936-) と同時代である。フランスからの留学から戻ったオリヴィエは、同世代の若者たちと文学および政治活動を行い、デュバリエ独裁体制と戦った。そのために1964年に国外退去を命ぜられ、以降、「国外追放者」としてハイチ国外で生きかつ執筆活動を行う「亡命作家」あるいは「亡命知識人」としての運命にその生涯を捧げる。最初はフランスに亡命するが、のちにマリ＝ジョセ・クレモー (Marie-José Glémaud) と結婚してカナダ、ケベック州のアビチビに、1968年から2002年に亡くなるまでの25年間、モンリオールの最後の作品の舞台となったコト・デ・ネイジュ地区 (Côté-des-Neige) に在住した。この都市では、モンリオール大学の教育学部の教授を務めながら、執筆活動を行い数々の作品を発表した。クレオール文学が世界的ブームとなった2005年来日し講演をしている。このブームは彼を一躍国際的に有名したが、彼の本領は彼が文学者であると同時に社会学者であった点にある。この点が他のハイチ人作家と違った彼の特性であり、優れたところである。翻訳されている唯一の虚構作品である短編「ほら、ライオンを見てごらん」を最初に読んだときに受けた印象もこの点にあった。ひょんなことからサーカス芸人となった男を描いたこの作品は、故国を出て異国に暮さざるえなくなった人間 (ハイチ人) が、移住地の様々な状況に応じて演ずべき自分の役割を変えていかざるをえない運命を描いた作品である。これは彼のすべての作品に通底するテーマであるが、個人的な体験であると同時に20世紀荷の

後半に本格的に始まったハイチ人の集団的な体験の多様性についての深い社科学的な認識に基づくものである。

フランス語を母国語として使いこなせるハイチの知識人にとってフランス語流通圏であるカナダのケベック州は他の移住地に比較して比較的生活のしやすい土地の一つではあったが、エミール・オリヴィエがこの地に移住した1960年代はこの作家がこの土地に生きてく上で特に有利な時期であった。

1960年代のケベック州では「静かなる革命」(révolution tranquille) と呼ばれる、社会の緩慢な変容が進行中であった。ケベック州では、旧来からのヨーロッパ系系の移民ばかりでなくハイチ人に限らず東南アジアおよび南アジア人、アラブ人、北アフリカ人などの新しい移民が増加し、それに伴って言語問題を含め国民的アイデンティティの問題が盛んに議論され、新しい規範作りへの模索がなされていた時期であった。エミール・オリヴィエは教育社会学者として、ハイチ移住者ばかりでなく他の地域からの移住者のための市民活動や公的機関の依頼を受けた活動にも深くかかわることになった。一方、文壇や論壇においても精力的な活動を行い、“*Nouvelle Optique*” や “*Collectif Paroles*” といった、ハイチ知識人たちのための雑誌の編集を通じて、デュバリエ体制下の本国で抑圧的な活動しかできなかったハイチ人知識人の発表の場を提供し続けたのである。

1977年には『盲人の風景』*Paysage de l'aveugle* をモンリオールで、1983年には『母・孤独』*Mère-Solitude* をパリで出版するが、前者はハイチ本国での政治的弾圧の体験とその後の彷徨が、後者は首都ポルトープランスをモデルにした町に住む一家族の数世代にわたる歴史を通じて、ハイチという国の暴力や貧困の状況を直接にテーマとした作品であるが、後年の小説『航海記』やエッセイ『立ち位置測定』と異なっている。

(2) モンリオールの歴史 静かなる革命

エミール・オリヴィエがカナダに移住した時期に進行していた「静かなる革命」(révolution

tranquille) とは、保守派のユニオン・ナショナル党を破ってケベック州統治の座に就いた自由党の党首ジャン・ルサーージュによって実行された年金制度の整備、電力公有化をはじめとする経済部門への州政府の介入、教育制度の改革など一連の社会改革である。カナダは様々な国からの移民から成る多民族社会であるが、イギリス系、あるいは英語を話す住民による支配の力が勝っていた。しかしケベック州はフランス語を話す住民が多数を占め、以前からそうした英語を話す住民の支配に抵抗して独立して独自の国家をつくろうとする風潮が存在した。「静かなる革命」によって醸成された改革への志向は、そうした風潮を強く主張する「ケベックナショナリズム」へと発展した。1976年にはケベックの分離・独立を主張するルネ・レベックの「ケベック」党が政権の座に就き、1980年と1995年の2度にわたってケベック州のカナダ政府からの分離独立を問う住民投票が行われたが、僅差で2度とも否決されている。ただし現在はケベック州の文化的、政治的、社会的独自性は認められつつある。

『立ち位置測定』には、エミール・オリヴィエがケベックに到着した当時のモンリオールの特性が詳しく分析されている。それは国外追放者として、パリを經由し、ケベック州の他の街での短い滞在を経て、最終的に30年以上にわたって過ごした人間のアイデンティティの変遷と深くかわりのある、都市の特性である。彼にとってアイデンティティの問題は、市民に生得的に与えられている自分の運命について永続的で予知可能な観念によって枠づけられるものではなく、コミュニケーションと移動の手段の発展によって国家の枠組みを超えて、複数の文化的選択肢によって働きかけられ、挑発され、浸透される開かれた構造のなかに組み込まれている。すなわちモンリオールはハイチ移民のエミール・オリヴィエにとって、アイデンティティの絶えざる変化、流動的なアイデンティティが要求される都市の一つだったのである (Ollivier 2001 : 39)。

(3) モントリオールにおけるハイチ人の人口分布：二極構造

エミール・オリヴィエの作品に描かれるモンリオールを考える上で重要な要素となっているのが、モンリオールにおけるハイチ人の居住地区である。モンリオールに置いてハイチ人移民が増加し始めるのは、デュバリエ政権が成立 (1957年) して以降の、1963-1970の時期であるとされるが (Michel Labelle et. als. 1983)、近年でも増加率の上ではハイチの移民の数は上位にある。表-1はモンリオールCMA (カナダの人口統計の単位で固有の意味でのモンリオールをしを含む4,259 km²、人口3,635,571人の大都市圏をCensus Metropolitan Areaと呼び、略してCMAという) におけるエスニック別の人口数である。図-1は固有の意味でのモンリオール市の地図である。エミール・オリヴィエあるいは『航海記』の主人公ノルマンは、市の西部Cotê-des-Neigesに居住している。この地区にはモンリオール大学 (フランス語系大学) があり、中産階級以上のハイチ移民の多くはこの地区に住んである。ハイチ移民が集

表-1 モントリオールCMAにおけるエスニック起源別人口上位15

モンリオールCMAにおけるエスニック起源別人口上位15 (2006)	
エスニック起源	人口数
カナダ人	1,670,655
フランス人	936,990
イタリア人	260,345
アイルランド人	216,410
イギリス人	148,095
スコットランド人	119,365
アラブ人	98,885
ユダヤ人	92,970 ^[1]
ハイチ人	85,785
中国人	82,665
ドイツ人	78,315
ラテンアメリカ人	75,400
北米インディアン	74,565
ケベック人	72,445
南アジア人	70,615

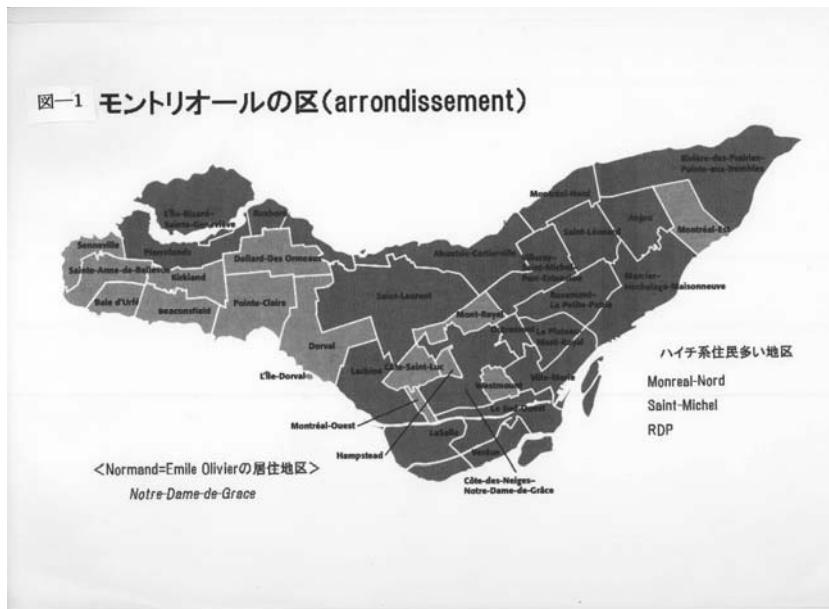


図-1 モントリオールの区

中的に住み、しばしばマスコミを通じて騒乱が報道されるハイチ人コミュニティがあるのは、市北東部のMontreal-Nord, Saint Michel, RDP (Rivière-des-Prairies-Pointe-aux-Trembles)である。すなわちモンリオールのハイチ移民コミュニティは二極構造になっている。

この二極構造は、ハイチ移民における二極構造のみならず、モンリオールという都市のもつ多元性の現れの一つである。前節に引用したアイデンティティの問題をめぐる議論と関連して、オリヴィエは「サンローラン大通り」(Le boulevard Saint-Laurent)という都市空間についての意味論的考察をおこなっている (Ollivier 2001:40-41)。

オリヴィエは、モンリオールの市街地を南北に通ずるこの大通りは、街を東西に分ける境界線の役割を果たしているだけでなく、この町に住む人間にとって、都市のぶらぶら歩きと都市的特権の表現の場であると同時に、自らの立ち位置を測定する「基準点」である。「移民の系譜学とその多元性を観察できる」場所である。

しかしながらモンリオールに生きることの難しさは、文化多元主義が、必ずしも民族の多様性

を融合するという方向に向かっているのではないという点にある。モンリオールは1960年代になって初めて都市化の時代を迎えるのであり、2種類の「異邦人」が存在するという。「ケベック州の農村部からの移住者」と「新参の移民」(アジア系、ラテンアメリカ系、アフリカ系、カリブ海系その他)である。これら二種類の「異邦人」のあいだには、大きな文化的距離、単なるエスニシティの相違には解消できない距離が存在する。これこそケベックに住むことによって強いらられる曖昧で流動的なアイデンティティ探求の独特の要因である。

ハイチ移民のあいだで暮らすなかにも、アイデンティティの変容、のちに引用するパラメーターの切り替えはコード化されている。前述のようにサンローラン大通りによって区切られる東と西という区分はハイチ移民のなかの階層的区分に対応している。

市の西部に居住するハイチ系住民の状況を示す、2007年にサミュエル・ピエールによって編集出版された『ハイチから来たケベック人：現代モンリオール形成へのハイチ人の貢献』(Ces Québécois

venus d'Haïti: Contribution de la communauté haïtienne à l'édification du Québec Moderne, Presses Internationales Polytechnique), (Pierre, : 2007) は、本のタイトルから想像されるものと違って、ハイチ人紳士録のような内容で「教育分野」4人、「大学および科学分野」12人、「健康分野（医師8人、看護婦4人、心理学者1人）9人」、「技術分野7人」、「文化分野（文学4人、コメディ及び演劇2人）」、「社会政治問題分野（社会・法律・司法4人、政治3人）」、「経済分野2人」、「スポーツ分野2人1組」。

いずれも成功者ともいうべき人々であり、モンリオール在住ではないが、2005年から2010年にDavid Lloyd Johnstonによって引き継がれるまで、27代カナダ総督としてエリザベス2世の名代を務めたMichaëlle Jean（1957年生まれの女性）がこのカテゴリーのハイチ人の代表格であろう。彼女は1968年に難民としてハイチからカナダに移住してきた。エミール・オリヴィエは文化分野・文学の4人のうち1人として掲載されている。とはいえ本書からは一人一人についてはかなりの情報量を得ることができ、将来における国外在住のハイチ人の本国に対する貢献を考えたとき重要な資料である。しかしコメディおよび演劇人2人、スポーツ分野1人を除いて、音楽や絵画などでポピュラーカルチャーの分野で活躍するハイチ人が除かれているのは片手落ちであると言わざるを得ない。モンリオールを根拠としてはいないが、Muzonのようなハイチ移民のヒップホップ・アーティストのメッセージに耳を傾けることなしには、都市在住者、特に若い世代の心性を理解することは不可能である。その理由は明白である。これらのポピュラー音楽家の多くは、この本に記載されている人物の多くが居住している地区の住人でないからであると考えられる。ハイチ移民について調査研究としては戦争、民族大虐殺、その他の人権侵犯によって母国を離れざるを得なくなったモンリオール在住者のライフヒストリーを調査するグループ（Montreal Life Stories）があり、そのハイチに関するワーキンググループが「集合的体験としてのハイチ人の難民体験の資料化」を試

みている。

（4）『通過点』（1991）の時間的空間的構造と『立ち位置測定』（2001）を分析することの意義

エミール・オリヴィエの虚構作品とエッセイは、前節に挙げたヒップホップ・アーティストのメッセージ分析と「モンリオール・ライフ・ストーリー」による聞き取り調査とは違った方法について提唱していると思われる。エミール・オリヴィエもライフヒストリーも、個人の体験についてのディスクールであるが、一見同じような試みに見えるが、実際には、エミール・オリヴィエは集団的経験についての聞き取り調査を批判している。彼の初期の作品においては両者はハイチ人の移住体験についてかなり近い認識をしていたのであるが、30年にわたる移住体験から、諸個人の体験を同一の枠組みでとらえることに対し否定的、あるいは一面的であると考えようになったと思われる。『立ち位置測定』の1節で、かれは移住体験を「自分の人生のパラメーターを大きく変えざるをえなかった」人々の体験ととらえ、個人のパラメーター変えるという体験は、各個人がおかれた状況によってそれぞれ異なるし、また同一個人においても人生の諸場面においておかれた状況が変わるごとにパラメーターの変換を絶えず迫られるのである。『航海記』は、エミール・オリヴィエ自身をモデルとしていると思われるノルマンという主人公が、健康を害して、長年住み慣れたモンリオールを離れ、温暖気候であり、故国に近いマイアミの地に旅をするという物語を中心に、ボートに乗って危険を犯してハイチの海岸を旅立ってマイアミにやってきた難民グループのリーダー、アメデーとキューバ人の恋人を追ってマイアミにやってきた若い女性コスモポリタン、アンパーロと出会う話である。マイアミはこれら3人にとってディアスポラの地であるが、それぞれの体験は、国外移住についてのハイチ人が集団的体験の1つとして位置づけることができるし、また理解をすることはできるが、その時点では互いに整合性をもっていない。

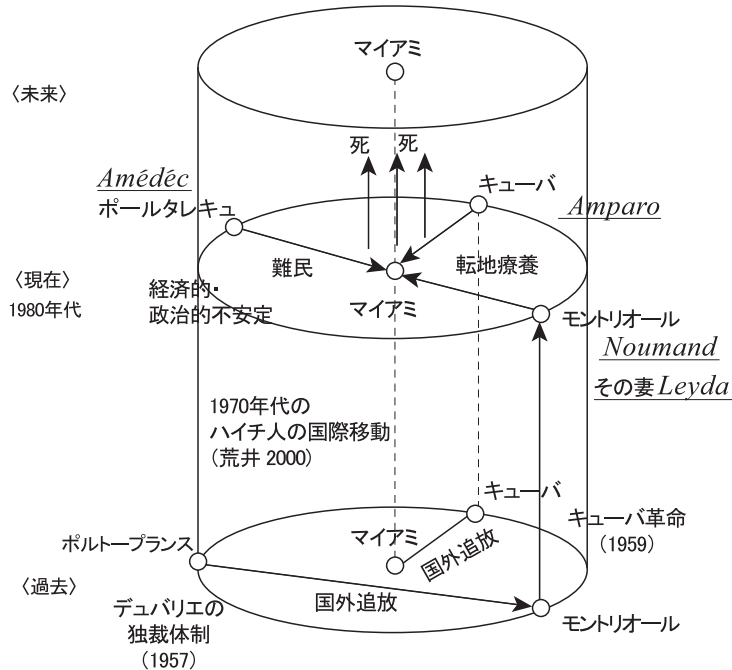


図-2 『Passages』の時空構造

エミール・オリヴィエは、このハイチ人の体験の多元性を時間的空間的構造の交錯として、図-2のような図式のなかで物語る。物語の記述は、通時的順序を無視し、また語り手も次々に変える。この試みの意図することは、画一化された枠組みでとらえられ、他から与えられた役割を演ずることを強られるハイチ人国外居住者自我の自己回復の物語である。多元性を時間的空間的構造のなかで語られることによってノルマンという個人の彷徨の物語が、国外に住むハイチ人の多元的な現実の総体を語る叙事詩にまで高められている。こうした自己回復の物語として『航海記』と『立ち位置測定』を読み取り、エミール・オリヴィエの作品全体の理解に達しようとするのが本論後半の目的である（続く）。

参照文献

荒井芳廣

2007 a 「ハイチ人の人口移動：甘い砂糖から苦

い砂糖へ」、鈴木紀ほか編『新世界地理第14巻：アメリカラテン・アメリカ』、朝倉書店、pp.211-222

荒井芳廣

2007 b 「移民と宗教「送り出し国の教会」(Désermite)と「受け入れ国の教会(Ermita de La Caridad)についての調査ノート」、『人間関係学研究』(大妻女子大学人間関係学部紀要) 8、pp.181-193

Achille, Théodore E.

2007 *Les Haïtiens et la double nationalité*, éditions du Marais.

Icart, Jean-Claude

1987 *Négriers d'eux-mêmes: Essai sur les boat people haïtiens en Floride*, Les éditions du CIDIHCA.

Labelle, Michel et als.

1983 *L'immigration Caribbeenne au Canada et au Quebec: Aspects Statistique*, Centre de recherches Caraïbes, Université de Montreal.

Pierre, Samue éd.

2007 *Ces Québécois venus d'Haïti: Contribution de la communauté haïtienne à l'édification du Québec* Modrne, Presses Internationale Polytechnique.

エミール・オリヴィエの主要作品

<エッセイ> :

1976 *1946/1976: Trente ans de Pouvoir Noir en Haïti.* (avec Cary Hector et Claude Moïse) Montréal: Collectif Paroles, 1976.

Haïti, quel développement? (avec Charles Manigat et Claude Moïse). Montréal:

1981 *Analphabétisme et alphabétisation des immigrants haïtiens à Montréal.*, Montréal: Librairie de l'Université de Montréal, 1981.

1983 *Penser l'éducation des adultes, ou fondements philosophiques de l'éducation des adultes.* (avec Adèle Chené). Montréal: Guérin.

1991 *La Marginalité silencieuse.* (avec Maurice Chalom et Louis Toupin). Montréal: CIDHICA,.

1992 *Repenser Haïti; grandeur et misères d'un mouvement démocratique.* (avec Claude Moïse). Montréal: CIDHICA.

2001 *Repérages.* Montréal: Leméac.

<短編および短編集> :

1977 *Paysage de l'aveugle.* Montréal: Pierre Tisseyre.

1995 *Regarde, regarde les lions.* (avec des photographies de Mohror) Paris: Myriam Solal.

1998 « La supplique d'Élie Mignan. », *Nouvelles d'Amérique* (Maryse Condé et Lise Gauvin, eds.). Montréal: Hexagone: 153-162.

1998 « Port-au-Prince ma ville aux mille visages. », *À peine plus qu'un cyclone aux Antilles.* (Textes réunis sous la direction de Bernard Magnier). Rochefort: Le temps qu'il fait: 45-56.

2001 *Regarde, regarde les lions.* (recueil de 15 nouvelles). Paris: Albin Michel.

2006 *L'Enquête se poursuit* (nouvelle). Montréal: Plume & Encre.

<小説> :

1983 *Mère-Solitude.* Paris: Albin Michel.

1986 *La Discorde aux cent voix.* Paris: Albin Michel.

1991 *Passages.* Montréal: l'Hexagone

1999 *Mille Eaux.* Paris: Gallimard (Haute Enfance).

2004 *La Brûlerie.* Montréal: Boréal.